

Ⅲ 研究と広報・社会連携

— 広報連携センター —

[概要]

博物館をもつ大学共同利用機関として、大学等との共同研究を推進し、その成果を国内外の研究者から一般市民まで広範囲に発信するとともに、広く社会や学校と連携して博物館の利用が促進されるよう広報連携活動を進めている。歴博の研究活動とその成果の公開に関して理解が広まりかつ深まるよう策定した広報の方針を基とし、以下の広報、出版、博物館活用、学校および社会との連携について活動を展開した。

1. 研究・展示・資源の広報

(1) 広報活動

2022年度に引き続き、PR会社を導入して企画展示や教員の研究活動の広報を行い、また企画展示に関連する催しを実施した。

全国版の雑誌、新聞等に有料広告を掲載し、企画展示のほかに総合展示についての誘客も行った。

企画展示・特集展示・くらしの植物苑特別企画と歴博フォーラムの開催に際し、ポスター、チラシ等を制作し、効率のよい配布やマスメディアへの掲載をはかった。特に、企画展示においては、報道関係者向けの内覧会を展示開始日の前日に歴博で開催し、都内からバスによる送迎も行って、効果的な広報を実施した。また、わかり易くかつデザインを工夫したプレス・リリースを作成・送付し、博物館活動の記事の掲載が増加するよう努め、センター主導により、魅力的なポスター、チラシの製作を推進した。

ホームページは、企画展示やフォーラム等諸事業の情報を遅滞なく掲載するため週2回の更新を行うとともに、メールマガジンを月1回程度配信した。また、YouTube、SNSによる企画展示や特集展示の情報発信を継続して行い、展示や研究などの活動をわかり易く紹介した。来館しなくても展示の動画や館蔵品のWebギャラリーなどのコンテンツをひとつにまとめた「どこでもれきはく」サイトを継続して更新している。2023年度は10年経過した現行サイトリニューアルを推進した。

(2) 講演会・フォーラム等による研究成果の公開

日本の歴史と文化の最新の研究成果を広く理解してもらうため、年8回の歴博講演会や年4回の歴博フォーラム等を実施した。また、くらしの植物苑観察会は、11回開催した。

2. 出版活動

刊行された国立歴史民俗博物館研究報告や展示図録を他機関などへ配布した。歴博に関係する研究活動を多方面から紹介する歴史と文化への好奇心をひらく『REKIHAKU』を、2023年6月、10月、2024年2月に3冊刊行した。さらに、博物館の研究及び事業について網羅した『国立歴史民俗博物館年報』をホームページに掲載した。

3. 博物館活用

特集展示・企画展示に連動した関連イベントとして以下のものを実施した。

- ・企画展示『陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—』における関連イベント「暦を作ろう」
- ・企画展示『歴博色尽くし いろ・つや・かたちのアンソロジー』における関連イベント「自分だけのオリジナル色見本を作ってみよう」、「おとなの塗り絵—縹緗彩色を楽しむ」、「赤から想起するもの世界100カ国調査」紹介

4. 学校および社会との連携

博物館で学ぶことの楽しさを体験できる場を目指して2012年度末に開設された「たいけんれきはく」では、主に小学生以下を対象とした体験プログラムと学習キットを、歴博の教職員が順次拡充している。

歴博は大学共同利用機関としての役割を果たすため、大学による講義やオリエンテーション等による歴博の利用を積極的に受け入れており、2009年から千葉大学国際教育センターと連携して実施している短期留学生によるワークシート作成プログラム「千葉大学・国立歴史民俗博物館 短期留学生プロジェクト」を開催している。

「大学のための歴博利用ガイドー歴博でアクティブ・ラーニングー」に基づく大学の利用実績をホームページ上で紹介している。

日本各地の歴史民俗資料館等の専門担当者に対し、文化庁との共催で、専門知識と技能のさらなる向上を目的として開催している「歴史民俗資料館等専門職員研修会」について、2023年度は昨年度と同じ受講者による2年目の研修が行われ、28名が受講した。

小・中学校、及び高等学校の教員とともに、歴博あるいは広く博物館の施設や資料を学校教育の場で活用することを実践的に討議することを目的として、博学連携研究員会議を2年単位で実施し、成果をホームページ上で公開している。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により来館できない学校団体への対応として、来館をしなくても博物館の展示を活用し、授業や教育活動等に生かせるよう、オンラインで学校の教室とつなぐ「オンラインガイダンス」の実施や、学校の教員や児童生徒が授業等に活用できる「教育用動画コンテンツ」について、今後どう有効活用するか、検討することになっている。夏休み期間には小・中学生向けのファミリープログラムを実施し、将来にわたって日本の歴史や文化に関心を持ち続ける人たちを育てるための取り組みを行った。

登録ボランティア活動については、寺子屋「れきはく」についてコロナ前の状況に戻して実施した。また、新規登録ボランティアの募集も行った。

広報連携センター長 高田 貫太